

んこのごろとてもしっかりしてきたね」とか
「あれっ、〇〇ちゃんお兄さんになってきたの
ね」といったあいまいな気付きかたしかできない
ことが多いのですが。

「ジュンバン」がよくわかって

いなかったこうすけ君

四歳児クラスのこうすけ君は、一月うまれ。

二歳児クラスに入所した当時は、言葉もあまり
なく、自分の気に入らないことがあると突然バ
タンとおおむけに倒れてただただ泣きわめくだ
け、なかなか気持ちを立て直すことがむつかし
いといった男の子でした。四歳クラスになっ
て、さすがに泣き出すととまらないといったこ
とはなくなりましたが、まだまだ「ジブンガ」
の思いの強さを前面に出すので、友だちとの
関わりもうまくもせず、マイペースの行動がめ

だっていました。

こうすけ君順番ぬかしはる！

二月初旬の給食の準備の時のことでした。月
齢の高い女の子たち数人が、スープの入ったお
なべの横にズラリと並び、「こうすけ君、順番
ぬかしはる！」と怒っています。見ると一番
前には、こうすけ君がお玉とスプーンカップを手
にプーッと怒って突っ立っています。

私は「こうすけ君、順番に並んでたんか？」
と問いました。女の子たちは声をそろえて「並
んだはらへん！」。とにかく早く用意をしたい
という思いで脇から手を出したこうすけ君は、
素直に認められないといった顔で、かたまって
突っ立っています。

「こうすけ君、みてみ、こっちに順番にならん
だはるんや。一人、二人、三人、ほら、こうす
け君この次やんか」と私がいうと、やっと自分

から列の後ろに並びに行きました。でも、悲しくて、くやしくて、声にならない声で涙をポロポロ。手にしたスープカップに溜まるほど涙ができました。自分の順番がきてもとてもその気になれず、結局もっと後まわしになってやっと、自分でスープを入れました。

私は、今までならただ大声で泣いていただけだったであろうすけ君が、口惜しい涙を流してこらえたことに、ひよっとしたら、自分を客観視できたのかもしれないと思いました。

翌日の給食の時、スープなべの前に二番で並んだこうすけ君が後ろに向かって、「おい順番に並ぶんやで！」と声をかけているのです。私は順番ということも、早生まれの幼さを残した四歳児にとっては、いつも人の後ろにつくことであり、意味がよく理解できてないこともあるのだということ学びました。

この後こうすけ君は、急にクラスの生活に目をむけはじめました。当番の仕事やひるね後のゴザの片付けに積極的に関わり出しました。

そして、二月末のやはり給食の準備中のことです。横から割り込もうとしたクラスで一番大きな男の子に、こうすけ君がしっかりした口調で「順番やで！」と注意したのです。はっとしたクラスメートは、素直に後ろにまわりました。まさに、さなぎからチョウになる一瞬のよう



なこうすけ君の変身でした。めったにないこと
だけども、こんな時が保育者冥利につきるとい
う時なのでしょう。

保育所の二歳、四歳クラスの

子どもたち

保育所の二歳、四歳のクラスは、めまぐるしく
発達し気を抜くことのできない〇歳クラス、
発達の大きい節目を乗り越えていく一歳、三歳
クラス、そして保育所の保育の総仕上げとして
位置づけられる五歳クラスとの挟間で、比較的
手の掛からないクラスとして位置づけられてい
ることが多いように思います。でも何度かこの
クラスを担任するなかで、二歳、四歳クラスは
実は、次の飛躍的な発達にむけてのたっぷりと
したエネルギーの充電期であり、ひとりひとりの
子どもたちとじっくり丁寧につきあうことが

とても大切と思うようになりました。

二年続きで二歳クラスの担任をしていて、二
歳から三歳になっていく子どもたちの変わりよ
うに感動を覚えることがたくさんあります。今
年は十一名に保育者が二名といったゆったり体
制なので、ひとりひとりの子どもの育ちが一層
よくみえます。

朝のおわかれがうまくいかなかった、お
しっここのタイミングがあわなくなつて、失敗ば
かりするようになった、いつもうんちを失敗す
るようになった、e t c . . .。二歳クラスにな
ると、今までうまくいっていた事が急に出来なく
なつておとなたちを困らせることがしばしばあ
ります。一歳児の時のたんなる「イヤ」や、だ
だこねではなく「ジブンガ」を強く主張する
「イヤ」なので大人にとってはとてもやっか
いです。

ジブンのことはジブンで決める！

私たちの保育所の二歳クラスでは朝のおやつ
のあと、お昼寝前、お昼寝後の三回、排泄時間
を決めています。

りょう君はこの春入所したばかり。保育経験
はありませんが、おとなのいうことをよくきく
素直な男の子です。お母さんは入所するにあ
たってオムツをとってきました。間隔も長くて
トイレでちゃんとできるようになっていました
た。はじめのうちはおしっこのおあと自分で流す
こともできるし、ついでに手洗い場で水あそび
もできるのでトイレに行くのが大好きでした。
保育所生活に慣れてきて、保育者との信頼関係
もできてきた五月初旬のある日、「お散歩に行
くからおしっこしてきてね」という保育者に
りょう君が「いかないの」というのです。「きっ

と途中でいきたくなるよ」という声に耳をかさ
なかったりょう君は、散歩から帰りついたとた
ん玄関で失敗してしまいました。

おひるねの前ももちろんいやがります。無理
にトイレにつれていこうものならそれこそ火が
ついたようにおこって絶対に便器にすわろうと
しません。もちろんすぐあとに失敗するので
す。二、三日りょう君と保育者のそんなやりと
りが続きました。

そしてある日散歩にでかける前、りょう君が
トイレに「いかない」といったあと保育者が
「じゃあ、いいよ。りょう君がいきたくなくなっ
たらいつてね」と言ってみたのです。りょう君は
部屋を走り出ていきました。そして、一分もた
たないうちに再び「おしっこ！」と走りこんで
きたのです。そんな日が三日ほど続いたおひる
ね前「りょう君おしっこいってくる！」とこん

どは自ら宣言してトイレにいきました。

このあと、りょう君は排泄の面ではすっかり自立しましたが、りょう君がジブンで決める”という点ではもつとこだわるようになりました。

ゆいちゃん三歳だもん

やはり同じころ五月に三歳になったゆいちゃんは、ここ数日パンツの中にウンチを失敗します。しかも、失敗したパンツを器用にぬぎすて、すまして便器にすわっているのです。汚れたパンツを洗いながら「ゆいちゃんウンチはトイレでしてね」「だまってないでおしえてね」というと「ウン」としっかりこたえます。

十日ほどそんな日が続いたある日トイレに走りこんでいったゆいちゃんのパンツをたしかめると汚れていません。トイレをのぞくとゆい

ちゃんが便器のそばにすくと立って「ゆいちゃんはウンチはトイレですの。三歳になったから！」とほこらしげにいました。

もちろんこのあと排泄はすっかり自立しました。そしてどちらかといえば、引っ込み思案でおとなしく友だちとのトラブルが起きるとただ泣くだけだったゆいちゃんは「やめて」「いや」をすっかり主張できる元気な女の子に変身しました。

二歳、四歳クラスは全体としては「ヤッター」と思えるほどの劇的な変化はないけれど、年中さわさわとさざ波がたち、ひとりひとりの「自我」がその度に確かな「自我」に育っていく、そんな場面に出会えるのがすてきなと思うのです。

(京都・村松保育所)